

MECHAROID ARC ANGELS

リユーマ

プロジェクト・セラフィム 概要

全銀河征服を目論む侵略型宇宙生命体、「アスタロト」を撃退するために地球軍第13日本東北支部が極秘裏に開発を進めた、対アスタロト専用兵器開発プロジェクトの総称。小型戦闘ロボット「エンゼルシリーズ」、及び大型機動戦艦「ケルベロス」の製作が目的である。

「エンゼルシリーズ」とは、人間が中に乗って操縦し戦う、いわゆる戦闘用人型ロボットの総称である。（ちなみに電気可動式）

エンゼルの雛型「ミカエル」をベースとし、特攻型の「ガブリエル」、超重火力型の「ウリエル」、高起動型の「ラファエル」を製造。

エンゼルには、「イメージーションコントロールシステム」（略してICS）を採用しており、これはパイロットが操縦する際に身につける特殊な手袋「マイコングラブ」を介して脳でイメージしたことをダイレクトにエンゼルに送信して操縦するシステムのことである。簡単に言えば、頭で考えた通りにエンゼルが動き、初心者でも簡単に高度なアクロバット飛行も戦闘も可能となっている。

さらにエンゼルには「特殊換装ユニット」というものが存在し、これは各エンゼルの頭とコクピット部分が本体から分離し、それぞれの特化した能力を持った別の体とドッキングするシステムもことである。

換装ユニットは空中飛行、高起動型の「アラエル」、砲撃支援型の「ザキエル」、宇宙空間用で小型のエターナルエンジンを搭載した「レリエル」との3種類がある。レリエルを装備した場合、ケルベロスから放たれる「エーテルビーム」内であればエネルギーは自動回復され、バッテリー切れの心配はなくなる。レリエルに搭載されたエターナルエンジンは小型化した結果、宇宙起動型しか開発できなかったのでアラエル、ザキエルには搭載できなかった。

「ケルベロス」とは、大型のアスタロト、または戦艦級の制圧が目的で製造された、大型機動戦艦である。

主砲に使われている重力粒子収束砲「ヘルゲート」、これは新たに開発された重力子（グラビティエナジー）を艦首の3つの発射口から発射、一点に集中した瞬間に増幅、前方に発射される超重重力波光線のことである。この重力子は色を持っており、人間の目には黒く見える。よってヘルゲートは、巨大な黒い帯のように見えて発射され、目標を重圧で押し潰し破壊する。使い方を間違えれば、世界地図の書き換えが必要となるほどに被害を与えてしまいかねない。

ちなみにこの計画には気違いじみた金額の予算が組み込まれているため、一度は却下された計画であった。東北支部は長い期間をかけ（節約根性）予算をどうにかまかない、極秘裏に進められた一種の軍法違反行為、違法プロジェクトである。

主要機体スペック

コード AE-01 ミカエル

スペック

全長 8.0m

重量 7.3t

速度（時速）

歩行：24km

走行：75km

高速移動：134km

使用装甲 サングルフォン合金

装備

33mmバルカン砲

有線ワイヤーナックル

高速移動用キャタピラ

オプション

電熱刀「コダチナイフ」（2本）

超振動剣「マサムネ」

72mmアサルトライフル

主要カラー 赤

解説

「プロジェクト・セラフィム」の第1号機、エンゼルシリーズの雛型。特に大きく秀でた能力はないが、逆に言えばどんな任務にも参加できる万能型エンゼルとも呼べる。全体の関節駆動率が高く柔軟でどんな兵器にも対応できる。

コード AE-02 ガブリエル

スペック

全長 7.7m

重量 6.4t

速度（時速）

歩行：24km

走行：84km

高速移動：157km

使用装甲 サングルフォン合金

装備

33mmバルカン砲

有線ワイヤーナックル

高速移動用キャタピラ

オプション

超振動十文字槍「ヒエン」

72mmアサルトライフル

主要カラー 緑

解説

「プロジェクト・セラフィム」のエンゼルシリーズ第2号機。

ミカエルよりも装甲を薄くすることにより、運動能力が上がった近接白兵戦闘型。

その他にワイヤーナックルの出力が向上しているが防御力に欠けるため

扱いが難しい。

機体スペック No 2

コード AE-03 ウリエル

スペック

全長 9.4m

重量 14.4t

速度（時速）

歩行：18km

走行：55km

高速移動：121km

使用装甲 サングルフォン合金

装備

33mmバルカン砲

有線ワイヤーナックル

高速移動用キャタピラ

オプション

70mmガトリング砲門×2

104mm対戦艦ライフル

151mmマイクロミサイルポッド×4

主要カラー 黒

解説

「プロジェクト・セラフィム」のエンゼルシリーズ第3号機。

「歩く要塞」の異名を持つ、超重火力と重装甲に集中した遠距離支援型機動砲台。

機動力を犠牲にすることによって、単機で戦艦を破壊し尽くせる驚異的は攻撃力を手に入れた。

コード AE-04 ラファエル

スペック

全長 8.6m

重量 9.2t

速度（時速）

歩行：24km

走行：73km

高速移動：135km

使用装甲 サングルフォン合金

装備

33mmバルカン砲

有線ワイヤーナックル

高速移動用キャタピラ

高起動バーニア

オプション

電熱刀「コダチナイフ」

72mmアサルトライフル×2

53mmリボルカノン

主要カラー 青

解説

「プロジェクト・セラフィム」のエンゼルシリーズ第4号機。

射撃機能に特化し、背部に大型のバーニアをセットしたことにより、高い飛行能力を手に入れた中・遠距離型エンゼル。

ただし飛行能力以外の基本スペックはミカエルと差ほど変わらない上、接近戦にはちょっと向かない。

特殊換装ユニット

コード CE-08A アラエル

使用装甲 サンダルフォン合金

主要カラー ターコイズブルー

解説

空中高起動型ユニット。

コード CE-09B ザキエル

主要カラー グレー

解説

重砲撃型ユニット。

コード CE-10C レリエル

主要カラー 各機のカラー（全色）

解説

宇宙行動用ユニット。

機動戦艦ケルベロス データ

コード HELX-0013C「ケルベロス」

スペック

全長 370m

重量 1200t

飛行速度

大気圏内 285km

大気圏外 362km

使用装甲 レヴィヤタン合金

使用エンジン エターナルエンジン

装備

重力粒子収束砲「ヘルゲート」

110mm単装リニアカノン

75mm対空自動バルカン砲塔システム

艦橋後方ミサイル発射管対空防御ミサイル

艦尾大型ミサイル発射管

単装ビーム砲

対空連装レールガン

艦対艦ミサイル

対空防御ミサイル

大気圏内用ミサイル

施設案内

ブリッジ（指令室）

作戦会議室

格納庫

艦内居住エリア

医務室

休憩室

食堂

シュミレーションルーム

バーチャルルーム

トレーニングルーム

大型浴室

遊戯室（100円ゲームから卓球台まで） ← 内緒の工事

主要カラー 漆黒

解説

「プロジェクト・セラフィム」の大型戦艦。

「この世に存在する全ての空間には、それぞれ違ったエネルギーが存在する」という理論をもとに、超高額予算と長い開発期間をかけて開発されたエンジン、「エターナルエンジン」を採用。大気中には大気中の、水中には水中の、宇宙空間には宇宙空間に存在しているあらゆるエネルギーをエンジン内で転移することにより、自らの原動力としている。エンジンが稼働している間は半永久的にエネルギー切れを起こすことはない。

しかし飛行エネルギーと防御用フィールドにのみ対応しているので、攻撃用の実弾兵器はいつか必ず切れてしまうのでそこんところ注意。

さらに防御フィールド内外半径200mにはエンゼルのエネルギー回復用の「エーテルビーム」という特殊フィールドが存在している。

ただしこれはエターナルエンジンを積んでいる宇宙用換装ユニットのみ適応されるので注意。

西暦、2032年。人類は未だにしぶとく生き続けていた。ただ生きていくだけでなく科学力も大きく発展し、生活圏を地球から大きく離れ宇宙へ進出、月の一部を人類の生活圏内へと変えてしまった。さらに十数年後、今度は金星と火星にまで手をかけ始めた。これにより人間の総人口数はなんと152億7300万人。異常。

しかしまあ、人が増えればそれに比例して思想も増え、最終的に問題も発生し始める。惑星同士の思想がぶつかり合い惑星間対立が発生、これが2059年。業を煮やした頭の悪い連中が放った一発の弾丸が引き金となり、2061年6月「地火金惑星間大戦」勃発。3つの歪んだ正義がぶつかり合い、世界中に多くの犠牲者が出てしまったとき。なんともはや

さらにまあ、何と言うか泣きっ面に蜂。同年9月、大戦中の金星に悲劇が訪れた。突如現れた謎の金属宇宙生命体が金星に大量出現し、金星に暮らしていた人間が数日のうちに制圧されてしまった。連中は金星を我物とすると、他の惑星にも手を出し始めた。

これを脅威と感じた地球と火星は、今までの喧嘩をまるで無かったことのように仲直りすると早速協定を組み、宇宙生命体の侵攻に対抗した。

この後宇宙生命体は、戦闘兵器種族「アスタロト」と呼ばれるようになった。

2066年、7月 ここは地球。

大昔問題とされていたオゾン層の破壊に伴った地球温暖化問題は、2026年に発明された人口オゾン層発生装置、「O₃ビームフィルター」によって解消された。

これは地球の成層圏に衛星を世界の数か所で打ち上げ、衛星が地球の周りに幕を張るようにオゾンと同じ効果をもったビーム物質で紫外線を防ぐ仕組みになっている。さらに人工物なので、天然のオゾンよりも数十倍強力長持ちで、そんな所そこのフロンガスでは破壊は不可能となっている安心設計。

この発明によって地球は「宇宙で最も美しい惑星」の名をとり返すことができた。

んが、人間の心は簡単には綺麗にはならないものである。

日本国東北地区の海辺の高い丘の上、ここに一軒のパチンコ屋がある。店のガラス戸がウィンと低い機動音と共に開かれると、店の中から人が出てきた。

いや、出てきたというより、ブッ飛ばされてきた。彼はコンクリートの地面に背中からたたきつけられると、その上にドサッとボストンバックが放り出された。

「痛ででで...何しやがんだこの糞ハゲジジイ!!!」

ブッ飛ばされた男は店の前で仁王立ちしている店の店長に対して尻もちをついたまま思いっきり啖呵を切った。

「じゃかしいわいこの糞ガキがあ!!!おまえはもうクビだ!今すぐ出て行けえ!!!」

店長も店長で広い額に浮かび上がった血管がブチ切れそうなくらいにブチ怒って言い放つと、喉の奥で「カ〜ッ」とパワーを溜めて啖唾を吐きつけて店の中に戻ってしまった。

「ざっけんじゃねえよハゲジジイ!!上等だ、こんな店こっちから願い下げだっつうんだよこの脳天鏡頭の糞ジジイがあ!!!」

男は荷物を持って立ち上がるとガラス戸に啖唾を吐きつけ、自分の自転車にまたがって坂を逃げるように下り始めた。

彼の名は伊達蒼馬（ダテ ソウマ）、23歳。職業、フリーター。いま現在バイトをクビになった回数は、今ので59件目。中学校時代に両親を事故と病気で亡くし、中学校を中退して一人でバイトをして生活しているのだが・・・。

その際、子供が見るのには早すぎる大人の汚い部分の集合住宅、俗に言う「裏社会」を知ってしまった。それが原因で性格がねじ曲がり、生きるためなら何だってしてしまう野良犬のような性格になってしまったのだ。

中学校時代から伊達は意外にも頭脳明晰で、並みの高校生クラスの成績を持っておったためにどんな仕事もそつなくこなせてきたのだが、この性格が仇となって今の状況となっているわけであった。

今の季節は夏、日差しは強いが自転車で坂を駆け下りていると冷たい風が肌に心地よい。しかし腹の虫の熱が下がることはなく、懐にはさらに冷たい風となって吹き付けてくる。

「ったく・・・これからどーすっかなあ〜っと」

今考えてみればさっきのパチンコ屋でのバイト代を貰わないまま追い出されてしまったんだ。今さら戻るなんてできないし、懐は現在季節外れの冬眠を迎えているし、このままではアパー

トの家賃はおろかメシにもありつけなくなってしまう。どうしたものか・・・。

その時、地面が突然大きく上下に揺れた。一瞬焦った伊達だがバランスを保ったまま急ブレーキをかけて停止すると、反射的に海を見た。この坂からは海が見える。そしてこの近くの海には、対アスタロト用の軍事施設、早い話軍の攻撃基地があるのだ。そこでは今まさに、大量のアスタロトが襲撃をして軍はこれに対抗していた。

今軍を襲っているアスタロトは、小型で戦闘力は低いが数で攻めてくる人海戦術型の襲撃部隊で姿が似ていることから「クラゲ」と呼ばれている。

この光景を見た途端、伊達はため息をついてポツリとつぶやいた。

「なんだ、またクラゲの群れかよ。今月で3回目だろこの襲撃？向こうさんもよくやるわな。まあどうせまた軍の返り討ちにあって撤退して終わりだろうけどよ…。どっちにしろ、俺は関係ねえ、関係ねえなと」

しょっちゅう繰り返されて見飽きている光景にうんざりしながらサドルに跨りなおすと、やれやれといった感じでまた自転車をこぎ出そうとした。

が、

ドゴオオン！！

軍の施設から、今まで聞いたことのないような大きな爆発が轟き、伊達の足が止まった。見れば、基地の建物や迎撃用のミサイルやビーム砲が、跡形もなく破壊され炎で包まれていた。そしてその周りを、生き残っている大量のクラゲが包囲し、いまだに攻撃を続けていた。

「...マジで？」

あろうことか、今目の前で住民の生命線ともいえる軍の基地が、簡単にクラゲの手によって破壊されてしまった。

間もなくしてあちこちから大音量でヴィーヴィーとサイレンの音が響き、機械で作られた声が避難命令を発令し出した。

その最中、基地の残骸を攻撃していたクラゲの内の一匹が、あろうことかとても見晴らしもよい所に立っている伊達の存在に気が付いてしまった。クラゲは仲間を一体連れろと一直線にこちらへ向かって飛んできた。

「おいおい...冗談じゃねーぞこの野郎！！！！」

伊達は急いで自転車をこぎ出して坂を猛スピードで下りだした。しかし所詮は人力で出せるスピードが科学で生み出されたスピードに敵う訳もなく、クラゲはあっという間に伊達との距離を縮めてしまった。

伊達の背後に一定の距離を保ったまま近づいてくるクラゲは、4本の足の先を向けた。すると先端が四分割されるように展開し、その中からライフルのように弾丸が文字通り雨あられと発射された。

「ギャアアアアアアア！！！」

伊達は巧みな体重移動で見事な蛇行運転を披露し、弾丸の雨を見事にかわしながら坂を下り続けた。昔経験したバイクのロードレースで培った技術がこんなところで役に立つとは夢にも思っていなかった。

伊達はペダルを踏み壊すくらいの気持ちで少しずつ加速していくと、もう一体のクラゲが行動に出た。頭を前に突き出し前傾姿勢をとると、その頭部が縦に割れて、その中からは是非とも見たくないものが現れた。チラッと見てみると頭部の装甲の内側には、20～30発ほどのミサイルポッドが搭載されていたのだった。それを見てしまった伊達は顔から血の気が引いた。

もちろんクラゲは「死ぬ」と言いたかったのか、問答無用とばかりに数発のミサイルを発射した。今度は弾丸と違い、どんなに蛇行してもまるで繋がれているかのように背中をピッタリと追い

かけてくる。

そしてついに・・・

ズドオオオオン！！

ミサイルは命中し、爆発した。しかし命中したのは伊達ではなく、自転車のみだ。伊達はミサイルが命中する直前に自転車を踏み台にし直撃を回避することを試みた。

作戦は見事に成功し、伊達は爆風と爆煙の中から脱出すると、地面にまた背中から叩きつけられた。

だが今度はそれだけにあらず、であった。今の爆発の衝撃と坂道の角度が相まって、伊達は今度は体が車輪の如くゴロゴロと回転しだし、とうとう止まらなくなってしまった。

「あががががが！！何なんだよ今日はよー！！止まんねー！！シャレになんねえぞこりゃ！！」

自力ではどうにもこうにもできないまま転がり続ける伊達に、新たな悲劇が訪れた。高速回転している世界に、あろうことか急カーブが映し出された。このままぶつかっては本気でシャレにならなくなってしまう。何とか命があったにせよ骨折は間違いなく最低10か所、まともにぶつかれば軽く昇天、例え生き残ったとしても後ろのクラゲに間違いなく次は蜂の巣！どう転んでも待っているのは「死」のみ。冗談ではない。

危機感を覚える伊達ではあったが停止するどころか徐々に加速しながら、とうとう背中から天然の岩肌にぶつかってしまった。

（終わったな、おれの人生...）

なんて思っていたりした途端、ぶつかって命を落とす前にぶつかった岩肌が回転扉のようにグリンと回転し、伊達は岩の中に吸い込まれてしまった。

おまけに岩の中は外の坂よりも急はスロープとなっており、伊達は世界一危険なジェットコースターに乗った気分ですり落ちた。

「うがああああ！！！！何じゃこりゃああ！！？」

とても長いスロープを右へ左へ曲がりくねりながら滑ってゆくと、今度はスロープから放り出されて本物の岩に背中から着地して、ようやく動きが止まった。幸いなことに軽傷で済んだようだ。

「痛ててて...助かったっぽいのか? ヴォエ」

渦を巻く世界と激しい吐き気を堪えながらゆっくりと立ち上がり、辺りを見回してみると自分は今何かの洞窟の中にいることがわかった。明かり一つなく、ただ周りにはごつごつとした岩盤しか見えない暗い洞窟だ。住民避難用の隠し地下シェルターかとも思ったが、人の気配は全くない。

伊達は服に付いた土を払うと壁伝いに歩き出した。何にせよ、入口があるならきっと出口もあるはずだ、そんな思いを抱きつつ、さっきの自転車競走でパンパンに張った足を引きずりながら前に進むことにした。

しかし現実は厳しく、歩けど歩けど一向に一筋の光明にも辿り着けずに10分が経過した。暗闇に目が慣れてきて辺りの光景が徐々に見えてきた。周囲をよく目を凝らして観察してみると、この洞窟は異常なほどにデカイ。横幅も、高さも軽く100mくらいはあるのではないだろうかと思うほどデカイ。しかも進むにつれて。表面の壁が気持ち少しずつ滑らかになっているような気がしてきた。この洞窟、どうやら天然のものではなく何か人の手が加えられた洞窟のようだ。ということは、きっとこの先には人はいるかは分からないが、出口はきっとある。 . . . はず。

「ぜってー出口はある。こういうときはプラス思考が大事なんだよプラス思考がよう . . . ん？」

そこへ伊達の研ぎ澄まされた聴覚が、何か音を捉えた。

カンカンカン、キーン、キューーン、カンカンカン

聞こえてきたのは、まるで金属工業系の工場のような音だった。この際聞こえてくるのが金属音でも銃撃音でも桃色のアレな声でも今は構わない。とりあえずこの先に人がいることは間違いないようだ。

歩調を少し早めて音のするほうへ向かうと、徐々に音が大きくなってははっきりと聞こえるようになってきた。さらには光まで見えてくるではないか。

「なににせよ助かったぜ！」

伊達は走り出すと、ついにその体に光を浴びることができるようになった！！

.....

だがすぐに立ち止まった。疲れも忘れてしまうほどの間抜けな面で、その目の前にあるものにただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

確かに人はいた。たくさんいた。全員灰色のツナギを着て走り回ったり、それぞれ何か工具やら機械やらを使って整備をしていた。

何を整備しているかって？

戦艦だよ戦艦！！

大きさは目側でも軽く300mオーバーの超巨大戦艦。全体のカラーは黒。長い長方形に近い形の先端には、三角形に分かれた三つの砲門がカスタマイズされ、艦体の上には司令塔みたいなものも突っ立っている。甲板の上や側面にもたくさんの大砲、ビーム砲、ミサイルなどが数えきれない程の数がある。

こんなものを生まれて初めて見てしまった伊達は、叫ばずにはいられなかった。

「...な、なんじゃこりゃあああああああ！！」

「うっせーんだよあんた！！こんな狭いところで騒いだらやかましいだろう！！」

伊達の絶叫の直後、背後から間髪いれない大声が鼓膜を振動させた。跳ね上がるように振り返ると、そこにはおっさんがいた。メガネをかけた顔にボッサボサの頭、どことなく胡散臭い表情。一応この男もツナギを着ているから、メカニックには違いないようだ。男はなぜかプラスチックメガホンを片手にし肩をポンポンと叩いていた。なんとなくから見える風貌からは、整備主任見える。（昔養った観察眼）

「あ？・・・何だおっさん」

「オタクこそ誰よ？今日来るって言ってた最後のパイロット？」

「パイロット？」

どうやらなんか誤解されているようだ。おまけにこの男、さっきから伊達の顔をジロジロと見ている。見られてる方としては不愉快極まりない行動だ。頭のとっぺんからつま先まで隅々まで見尽くすと、男はポリポリ頭をかきながらもう一度伊達に顔を向けた。

「ふ～ん・・・何か悪者みたいな面した奴だな」

初対面の人間に対して礼儀の知らない男だった。悪人顔は自覚しているがこうやって面と向かって言われると、ただでさえ細い堪忍袋の緒が簡単に切れた。こう見事にプツーンと。

「んだとこの野郎...ブッ飛ばされてえのか？」

頭に血管を浮きだたせて胸ぐらを掴もうとしたその直前、洞窟内に大きな爆音と地震のような揺れが発生した。すると今度は洞窟内中にサイレンの音が響き渡り、男の声のアナウンスが流れた。

『非常事態発生！！クラゲの軍団にこの地下ドックが気付いて攻撃を仕掛けてきた！もう囲まれかけている、パイロットは直ちに発進せよ！繰り返す、パイロットは直ちに発進せよ！！』

この放送が流れた途端、立ち止まっていた整備員全員が動きを速めた。ある者は高速で溶接し、ある者は急いでネジを締め、ある者は特急で辺りを駆け回る。

「なんだあ？何が起きてんだ？」

たった一つの放送でこの有様、伊達はいまいち状況が飲み込めずにいた。

「ちい、思ったより早かったな。...あんた、パイロットだろ？急いで発進準備にかかるぞ、こっ

ちだ！！」

男は突然伊達の襟首を掴むと、近くに転がっていた運搬用の車に放り込ませると、自分が運転してドックの中を道交法を無視するスピードで爆走し始めた。巨大な戦艦の脇を通過すると、その後方を目指して車をブツ飛ばした。乗っている方のみにしてみればこの乱暴な運転とスピードは簡易ジェットコースターと同じ、安全装置なんかついていないくらい危険なアトラクションである。

「オイオイオイオイオイおっさんんんんん！！人のことどこ連れて行くきだゴルァア！！」

「いいからさっさとこれつけて準備しろ！！」

伊達の言うことに対してノーコメント（と言うかガン無視）のまま、男は伊達の顔に何か叩きつけるように渡した。手に取ってそれが何か見てみると、それは革製の手袋のような代物だった。茶色い薄手の素材に、手の甲の部分には十字架のようにも見える紋章が刺繍されていた。

「・・・？あんだこりゃ」

「その手袋が無きゃ動かねえんだよお前の機体はなあ、オラ着いたぞ！」

今度は突然車を大きくドリフト回転させると、シートベルトを締めていない伊達は遠心力に引っ張られて車の外へ乱暴に放り出された。またもコンクリートの上を二三転して、やっと止まった。さっきまでのジェットコースターと今の転倒で体中痛いわ気持ち悪いわで、本当に今日は厄日なのかもしれない。

「ほらそんなところでモタモタしてんじゃねえぞ！！早くこっちだ」

いつの間にか車から降りていたあの忌々しいおっさんがまた大声で騒ぎながらうずくまる伊達のすぐ隣を横を走り去って行った。

伊達はフラフラする体に鞭を打ってヨロリヨロリと起き上がると、自分の目の前にあるものに目を移した。それを見上げた途端、最初にあの巨大戦艦を見た時と同じ感覚が体中に走った。疲れも吐き気もぶっ飛ぶような、強い衝撃力。

目の前にあるのは...いや、立っているのは、紛れもなく...

ロボットだった。

頭がある。体もある。腕も脚もある。完璧な人間の形をした、ロボットと呼べる機械がそこにあった。ただ身長は10mもないくらい小さく、おまけに何かズングリとしている気がする。気持ち短足気味。

しかしロボットなんて見るのは、漫画やアニメの世界以外では生まれて初めてだ。差程詳しいわけではないのだが、二足歩行型ロボットというのは、体のバランスがどうだとかいろいろ難しく、再現はかなり難しいらしい。しかし目の前にあるこの赤いロボットは、間違いなく実現されている。

「な、何でこんなものが存在するわけ？」

「早くしろバカ野郎！！」

先に行っていたはずのおっさんがいつの間にか戻ってくると、伊達の襟首を掴み上げてまた走り出した。痛がる伊達の声も耳に届かない様子でロボットの側にある昇降機まで引っ張りこむと、叩きつけるようにスイッチを押してロボットの頭近くまで昇った。覗いてみると、人間で言うところの喉の付け根辺りにハッチが開いていて、その奥にシートが見える。あそこがコクピットってやつだ。

「おらさっさと入れ！」

おっさんは後ろから伊達の尻を蹴ったぐると、無理やりコクピットの中に文字通り落とし入れた。結果伊達はまた落下して中のシートに今度は顔から着地してしまった。

「いって～・・・痛て一んだよさっきから！！この糞オヤジ！！」

「やかましいんだよ、さっさと発進しやがれってんだよ！オーイ一番機射出準備急げ！」

さっさと言いたいことだけ言ってハッチを締められると、プシューっとエアーが抜けて密閉されてしまった。

それと同時に機体に電源が入り、真っ暗だったコクピット内のコンソールパネルが起動し、三方向のモニターが周辺の景色を映しだした。

「オイオイオイオイ、これマズインじゃねえの？」

今さら確かめるようだが伊達はパイロットなどではない。この先一体どうしたらよいのか分からずアタフタしていると、眼前の空中に突然モニターが浮かび上がってさっきのおっさんの顔が現れた。

『いいか、今から発射台まで運ぶから、射出したらある程度暴れるなりして時間を稼げ。こっちも急いでケルベロスを発進させる。』

「じ、時間稼ぎ？ケルベロス？何言ってんだよテメェ！？」

『パイロットがギャーギャー騒ぐんじゃねーよ！！さっさとグラブはめてメインエンジン起動させろやこの臆病者！！』

・・・・・・・・・・。

臆病者。このセリフが吐かれた瞬間、伊達の耐久力のない糸がプツンと切れた。まとめて5、6本くらい、簡単に。

「・・・・・・・・アアわーったよ！！時間稼ぎでもなんでもやってやろうじゃねえか
ゴルアア！！！」

逆切れした勢いで妙なやる気が出てきた。さっき渡されたあの手袋を両手にはめると、両サイドに見つけた車のギアに似たコントローラーを握った。とたん、グラブの紋章が淡く輝くとメインパネルに機体のエネルギー残量や弾の弾数など細かなデータが表示されて、メインエンジンが起動した。おまけに伊達の鼻息もなぜかとても荒くなっている。

機体の両肩にアームのついたワイヤーが取りつくとゆっくりと持ち上げて発射カタパルトまで運びこんだ。ワイヤーが切り離されてカタパルトの上に降ろされると、頭上から強い光が差した。見上げるとそれはライトではなく、自然の太陽の光だった。天井が開いて射出口がこの上にあるようだ。

全ての準備が整った。

『よーしいくぞお！アークエンジェル一番機ミカエル、発進だぁ！』

外であのおっさんが指示を出した瞬間、カタパルトがバネの様に跳ねあがって機体が一気に真上めがけて飛んだ。伊達の体には全身に鉛が載せられたような強いGがかけられ、体が押し潰されそうな感覚になる。

約5秒ほどで、このミカエルと呼ばれたこの機体は縦のトンネルを駆け上がり、地上へ姿を現すと大空へ向かって高〜く飛んだ。

しかし、そのまま高く飛んだだけで、上空50mくらいのところで直下へ落ちてしまった。ここで落ちて考えてみれば、伊達はパイロットなどでは決してない。だからこのミカエルの操縦法なんか全く知らないのは当たり前なのだ。

「ヤッベっ！！どうしたらいいんだよオイ！！」

『何やってんだよお前は？とっととブースト吹かせよ！』

パニックになっているところにまたさっきのおっさんが謎の空中画面に顔だけ出現した。

「知らねーよ操縦法なんて！！」

『おまえホントにパイロットかよ！？コントローラー握って頭ん中でイメージだろ、簡単だろうが！！』

「ああ！？イメージだあ？」

一体何の事だかさっぱりわからないのだが、とりあえず改めてコントローラーをもう一度ギュッと握り直すと、言われた通りにイメージしてみた。

「現状を打破するイメージ、空を飛ぶイメージ……」

頭の中でイメージが固定しかけてくると、グラブの紋章がまた淡く輝きだした。とたん、ミカエルのメインカメラが光を放ち、起動した。背中バックパックが開くとブースターが火を吹き、落下速度が急減速しゆっくりと着地することができた。とりあえずしょっぱなの危機は脱したみたいだ。

「フウ…助かった。」

と、思うのもつかの間。コクピット内にビービーと赤い表示と警告音が響いた。目の前にはクラゲと違う地上攻撃兵器「クモ」が5～6匹立っていた。そのすぐ後に、空中画面に自分の今の状況が細かく数個の画面になって表示された。

『敵数15』

『周囲、完全包囲』

『全力で逃げましょう』

「でえええええ！？」

頭をグリグリ回して周囲を見待たすと、確かに今ミカエルは完全に包囲されていた。クモは一斉

に自分の頭よりも大きい尻を向けると、クラゲの時と同じように縦に展開して中からミサイルの山が姿を見せた。

伊達はわずかな悲鳴を漏らすとブースターを全開に吹かして直上へ急上昇し、紙一重でクモのミサイル弾を回避できた。足元では自分たちが発射したミサイルに対応できずに自爆したクモ共の爆発が立続けに起きている。

だが安心できたのもつかの間、空中には先程まで軍の基地を攻撃していたクラゲの群れが数を成して待ち構えていた。

もうここまで来たら逃げ回っているのも癪だった。伊達はとっさにこのクラゲ共を倒したいと頭の中でイメージしてみた。するとやはりミカエルがそれに応えるように動いてくれた。ミカエルの右手が拳を作り、肘のパーツが腕を支点に反転して手甲の様に拳を覆うと、肘の中に仕込まれていた小型ブーストエンジンが勢いよく火を吹いてさながらロケットパンチの如く吹っ飛んだ。ただ残念なのは発射されたパンチにはワイヤーでつながれていたため、伊達が思っていたロケットパンチとは少しイメージが違ったことだった。しかしそのパンチはまっすぐに一匹のクラゲの顔面に命中すると、爆発四散した。

「なんだよ、やりやできるじゃねえか俺！よっしゃあ！！」

伊達は何を思ったか、延び切ったワイヤーを左手で掴むと、まるで鞭か鎖付き鉄球の様にぶん回して右拳を周りのクラゲ共にお見舞いしてやった。この一撃で薙ぎ倒された数は16と表示された。

「ヒッハハハハハア！！ノってきたー！！」

調子づいた伊達は一度腕を装着し直すと、一気にブースターを吹かしてクラゲの群れの中に突っ込んでいった。このまま近づいて接近戦にもつれ込むつもりらしい。ターゲットとされたクラゲは後退しながらミサイルを放って応戦するが、伊達は今日初めてミカエルに乗っているとは思えないスピードとテクニックでかわすと、次々に空中でクラゲを破壊し尽くしてしまった。時折ブースターの連続飛行が切れて地上に降りると、足底部に内蔵されているキャタピラを使って加速、急接近するとクモが攻撃をするのよりも早く顔面を殴りつけて撃破してしまう。すでにたった一人でクラゲ、クモを全部で30以上倒してしまった。

「ギャハハハハハハ！！楽しすぎるうう！！」

さらに勢いに火のついた伊達は次のクモに鉄拳を浴びせようとしたその時、最悪のタイムリミットが訪れてしまった。

突如目の前に、ミカエルのエネルギー残量不足の警告表示が浮かび上がり、コンソールパネルが徐々に光を失っていった。改めて確認すると、すでにエネルギー残量はレッドゾーンをとっくにオーバーしている。

「ゲッ！こんな時にかよ！？」

さらに周りを見れば、画面いっぱいにくモの大群が映し出されて隙間なく囲まれてしまっていた。全員親の仇を見るような眼でこちらを睨み、ジリジリとにじり寄ってくる。まアご立腹なのは仕方ないだろう。

...ってそんなこと言っている場合ではない。エネルギー0で動かない上、クモは全員尻をこちらに向けている。伊達蒼馬、今世紀最大のピンチ！！

「ヤバイヤバイヤバイ...動け、動けこの野郎！」

伊達は必至になってコントローラーをガチャガチャ動かしてはみるが、ミカエルは一瞬の反応も見せてはくれない。コンソールを適当に叩いても何の反応もない。

伊達はまたも一瞬だけ「死んだな...」と思い始めた...

だが、神は伊達に味方した。

モニターの真横から飛んできたワイヤーナックルが数匹のクモにめり込み、撃破してしまった。もちろんこれはミカエルの攻撃などではない。続け様に上空から数発の小型ミサイルが飛んでくると、全段見事にクモに命中して爆破、四散した。

「な、なんだ？」

先程ワイヤーナックルの飛んできた右横のモニターを確認すると、そこには二機の新たなロボットが立っていた。片方のワイヤーを戻して腕を装着した緑色のロボットは、今伊達に乗っているミカエルによく似ている。もう片方の黒いのは緑より機体が一回り大きく、全身の装甲が分厚い。まるで戦車の様なロボットだ。

「なんだあいつら...味方か？」

そこへまた、空中画面が二つ浮かび上がって二人の顔が映りだされた。一人は垂れた糸目の優

男で、もう一人はショートカットにヘアバンドの活気のありそうな女だった。もちろん誰なのかは知るわけがない。

『大丈夫ですかー？後先考えずに行動していると危険ですよー』

と、優男が。

『悪りい悪りい、出んのが遅くなっちゃまってよう。すぐ加勢すっからなあ』

と、ヘアバンドがしゃべると、またもう一人新たな男の顔が空中画面に現れた。今度は茶髪の眠そうな顔をした男だった。

『おーい、喋ってばかりいねえで誰がこっち手伝えよっと。』

そう告げると上空で爆発が起きた。上を見てみると、木々の間から空を飛んで戦っているロボットの姿が見えた。そいつは青い体で背中に背負ったミカエルのものより大きいブースターで空を縦横無尽に飛び回り、両手に持った二丁のライフルでクラゲを一発も撃ち漏らすことなく破壊している。

『あいよー、ほいじゃあたしが行って来っから上杉、下の駆除頼むぞ』

それだけ言うとヘアバンの顔が消えて緑のロボットはバーニアを吹いて空へ跳んで行った。

『はいはい。えっと、それじゃあバッテリー交換しちゃいますね。動かないで下さいよ。』

優男の画面も消えると、黒いロボットがミカエルの背中まで近づいてきた。そのままゆっくりと腕を近づけると背中の中辺りから灰色の箱のようなものを取り外した。そしてそこに別の箱をセットしてくれた。とたん、光を失っていたコンソールが光を取り戻して再び起動した。どうやら今の箱のミカエルのエネルギーパックみたいなものようだ。

「おう、悪りいな。」

『いいえ、同じパイロットですしね。それじゃあクモの駆除をしちゃいますのでちょっとどいてください。』

そういうと黒いロボットはミカエルの前に立つと、全身をどっしりと低く構えて攻撃態勢に入った。両肩と両腰からはマイクロミサイルポッドの蓋が開き、胸の装甲の奥からは二門のガトリングガン、左脇からは大型のガトリング砲、右脇からは伊達も見たことのある対戦艦用ライフルが出現した。全ての砲門の照準を正面のクモの群れに合わせると、一斉に火を噴いた。

ガガガガガガガガ！！！！

ドシュンドシュン！！！！

ドシュンドシュン！！！！

ドギョーン！！ドギョーン！！

ドギョーン！！ドギョーン！！

バノバノバノバノバノバ！！！！

耳を塞がないと鼓膜が破れてしまいそうな程の発射音が辺り中に轟き、飛び出された無数の弾丸がクモを正確に捉え、打ち抜き、破壊され、爆破した。この間わずか8秒。

この一度だけの一斉射撃で、目の前にあれだけいたクモの群れが火災レベルの爆炎と共に消滅した。これをやらかしたのがさっきのあの糸目男なのだと思うと……

人ってのは見かけによらないものだ…。

「……おっかね」

『フウ、大体片付きましたね。それじゃあ後は上の掃除をしましょうか』

黒いロボットは休むことはせずすぐさまガトリング砲を空へ向けて射撃し始めた。伊達も空を見てみると、空も相当大忙しのような。前後上下左右、全方向から迫ってくるクラゲの群れを二機のロボットが見事なアクロバット飛行で攻撃をかわし、弾丸を一発も漏らさずに、拳一発外さずに撃破している。見ればわかるのだが、あの青いロボットは銃を使った射撃戦が得意の様で、反対に緑のロボットはミカエルと同じように接近して相手をブチ殴るという接近戦が得意のような。確かあの緑には女が乗っているはずなのだが、ブチ殴ったり蹴ったぐったりと、実に男らしい戦い方だ。

「おっと、俺も行かねえとな！そいつらは俺の獲物だあああ！！」

ミカエルはブースターを一気に吹かすと空へ跳び上がった。そしてさっきと同じようにワイヤーナックルを飛ばしてクラゲと応戦した。

空では3機の活躍と、地上からの援護射撃によって、あれだけいたクラゲの群れはあっという間に数を減らしてしまった。

「おっしゃあ！コイツで48機目！！」

『ヒュ〜』やるじゃないかよっと、ミカエルのよう』

「すっかり操縦にも慣れたし、慣れればどうってことねえよこんな雑魚共！」

『どうやらこれで終りの様ですね』

『いんや...そうでもないっぽいぞ。上見てみろよ上を！』

ヘアバン女に促されて空を全員で見ると、クラゲの残党が空の向こうへ逃げていく様子が見える。

が・・・

すぐにその視線はそのさらに向こうへと注がれることとなった。四人が見ているのは、雲の向こうから現れようとしているものだった。それは、クラゲの数百倍の大きさを誇る巨大アスタロトだった。タコのようなその形状から、「クラーケン」と呼ばれる大型戦艦級のアスタロトであった。しかもそれクラーケンが、空から3体も降臨しつつあった。今までクラーケンなんて見たことのなかった伊達は、口をアングリと明けて呆然としてしまった。

「えええええええええ！！？」

『オイオイオイオイ、どうすんだよ？あんなの殴れねえぞ？』

『今の残弾では、一体を落とすのが精一杯だと思います』

『ってことはだ、逃げの一手ってことでいいなっと。んじゃ逃げるぞー』

三人は呆然と立ち尽くす伊達を放ってさっさとその場から離れてしまった。その場から一步も動いていないミカエルを、クラーケンは見逃さなかった。八本の内の一本の足をミカエルへ向けると、先端からクラゲのような実弾ではなく、高出力のビームが放たれた。伊達はここでようやく気がついた時には、回避運動が間に合わないタイミングとなっていた。

しかしミカエルはこの直後に攻撃を回避することができた。青いワイヤーナックルがミカエルの肩を掴んで引っ張り上げ、引きずるように回収された。

『おいミカエルの、あんま面倒かけさせんじゃねえぞっと』

「あ...悪い」

画面越しの茶髪男に詫びを入れると、今度は別の画面が今までよりの大きな画面で出現して別の顔が表示された。今度は赤いフレームの眼鏡をかけた無表情の女、と言うより少女だった。

『各パイロットの皆さん、お疲れ様でした。ブリッジより業務連絡です。ケルベロスの発進準備が整いました。つきましては主砲で山を砕くのと同時に、クラーケンを撃破しますので直ちに離れてください。』

「ケルベロス？主砲？」

何の事だか分からないまま画面は消滅してしまった。ミカエルはズルズル引きずられ続けて山の裏へ退避された。

クラーケンはそれでも尚ずんずんと近づいてきている。八本の足をこちらへ向けて攻撃態勢に入っている。このままではやられる、と思っていた

次の瞬間！

ドゴオオオオオオオオオオオ

オオ！！！！！！

目の前の山が内側から破壊され、中から巨大なビームが発射飛び出した。山を一撃で切り崩し、ビームはそのまま一体のクラーケンに直撃した。クラーケンはビームの中で大きくひしゃげ、押しつぶされ、一瞬で蒸発するように爆発した。このビーム、並みの威力ではなかった。

一体何事かと思ってさっきまで「山」であったはずの地点をみると、山にはドデカイ穴が空いて、煙が上がっている。そしてその穴の奥から、わずかにゴウンゴウンと唸りを上げているエンジンのような音が聞こえてきた。

少しすると、穴の奥からその正体を徐々に現した。

出現したのは、あの時洞窟で見た真っ黒い巨大な戦艦だった。その戦艦が今、山の中からゆっくりと飛び出し、空へ浮かび上がった。

その信じがたい光景に圧巻していると、またあの眼鏡女が出てきた。

『第二は撃ちます。アークエンジェル部隊は直ちに帰還してください。以上です』

それだけ言ってまたすぐに消えた。周りのロボットたちは「了解」と一言軍人みたいに返事をする、全機は黒い戦艦へ向かって飛んで行った。ミカエルも繋がれたままだから自動的に引っ張られて飛んで行ってしまった。四機は戦艦の先端、三又の砲門の上にある出入り口から入艦した。

その直後、砲門に変化が起きた。三つの砲門にエネルギーがチャージされ始めた。通常、現代に流通されているビームと言え、エネルギー粒子の関係がどうのこうので色が白か黄色に見えるものなのだが、このチャージされているエネルギーはどういうことか、闇を思わせるかのようにとっても黒い。

「いったい何なんだよこの戦艦はよう...？」

出入り口のそばでその様子をぼんやりと眺めていると、また空中画面が浮かんできた。画面にはあの恐怖の糸目男の顔があった。

『あのう...あんまり近づいていると危ないですよ』

「へ...？」

振り返ってみると、ミカエルは出入り口のすぐそばに立っているが、他の三体はずいぶん奥まで下がっている。これが何を意味しているのか、この後すぐに理解できた。

時すでに遅し、チャージが完了した砲門は、とうとう発射された。発射された三つのビームは、ピラミッドを描くように中心で一つに集められたとたん、炸裂裂するように一本の超極大のビームとなってクラーケンめがけてまっすぐに飛んで行った。回避運動の遅い二体のクラーケンはビームの直撃を受け、一瞬で破壊された。

ついでに言うと、砲門の一番側にいたミカエルは発射された時の衝撃で思いっきり反対側の壁まで吹っ飛ばされてしまった。おまけに言うならミカエルはなぜか逆さまになって壁にぶつかり、その勢いでハッチの開閉スイッチが勝手に入ってハッチが開き、コクピットから伊達が転がり落ちてきた。

「.....もう、勝手にしやがれ」

それからしばらくして、戦艦は付近の沖合に着水し、伊達を含めたパイロット達はブリッジに呼び出された。（伊達はこの時脱走を試みたが茶髪男に拘束された）

長い廊下と数枚の自動ドアをくぐってたどり着いたブリッジは、思っていたよりだいぶ広かった。なんとなく全体が大学なんかでよく見る段々机の教室のように見える。説明するなら、一段目が大人数が整列できそうな広いホール、二段目が何やら色々機械が詰まった三つの座席、三段目、つまり一番上が手すりのついた一つの椅子。艦長席ってやつだろうか？

「...てな訳で皆さん、お疲れさまでした」

そう労いの言葉をかけてくれたのは、例の眼鏡の小娘だった。だいぶ小柄で見た目だけで見れば、大体15歳くらいだろうか。まだガキの匂いがしている。

「私はこの艦でオペレーターを務めています、森 桔梗（モリ キキョウ）と言います。よろしく」

小娘は完全無表情のまま素っ気ない挨拶を済ませると、座ったままペコリとわずかに頭を下げた。挨拶のつもりだろうか。

それから順に流れて自己紹介が始まった。最初に名乗ったのは、ヘアバンドの女だった。

「アタシは真田 茜（サナダ アカネ）、アークエンジェルス二番機『ガブリエル』のパイロットだ」

次に前に出たのは茶髪男。

「俺あ武田 紅（タケダ コウ）、四番機『ラファエル』に乗ってるパイロットだぞっと」

最後はあの糸目男。

「僕は上杉 藍人（ウエスギ アイト）、三番機の「ウリエル」のパイロットです。よろしくお願ひします」

三人は森に返すように名乗ると、森は眼の前のコンソールを叩いてコンピューター内に登録されている乗組員名簿と照らし合わせた。三人とも名簿に名前が載っていることを確認すると顔をあげてチラッと伊達をのぞいた。

「・・・で、あなたは？」

どうやら伊達の順番が回ってきたようだ。全員の視線が自然と伊達に集中された。さすがに困った伊達はボリボリと頭を掻きながら全員から視線を反らした。しかし一度ため息をつくと観念したように全てを包み隠さず話した。

「・・・はあ。伊達 蒼馬、ぶっちゃけるけどなあ、俺はパイロットでもなんでもない。事故でたまたまあのミカエルってのに乗った・・・ぶっちゃけの民間人なんだけどよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

静まり返った。芸人が滑ったギャグをかましたみたいに、シーンと。

「...どういったシャレだ？笑えないぞっと」

「シャレでもなんでもないんだなこれが。マジで俺がミカエルに乗っていたのは事故なんだよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

「「はあああああああ！！！！？」」

「おやおや・・・」

「・・・勘弁して」

真田と武田は当然の反応を示す中、上杉と森だけはやけに落ち着いた反応を見せてくれた。ちょうどそのタイミングで、艦長席の後ろの扉が開き、そこから大きな軍服を着こなし杖をついた老人が出てきた。白と黒の軍帽を目深くかぶり、口の周りには白く長いひげが蓄えられている。顔は見えにくいが相当年をとっているはずだろう。

「どうしたのかな、桔梗君？」

「はい艦長、パイロットの中になぜか一人だけ民間人が混じっていました。しかも先の戦闘では勝手にミカエルに乗り込み先陣を切って出撃していたそうです。」

「だからそれは事故だって言っただろうがよう！！勝手とは何だ勝手とはゴルァ！！」

伊達は例によって簡単にブチ切れて森に向って怒声を浴びせた。だいたい把事情を呑み込んだ艦長と呼ばれた老人は、髭をいじりながらゆっくりと階段を下りてホールに足をついた。そしてそのままの歩調で伊達のすぐ側まで近づくと、ジッと伊達の顔を眺め出した。

「フ〜ム・・・それはさておき、きみ、クモとクラゲを全部で何機落とすのだい？」

「・・・は？」

何を言い出すのかと思いきや、いきなりそんな事を聞いてきた。

「えっと、確か48機...だと思う」

「フムフム...おっと申し遅れたのう。わしはこの戦艦『ケルベロス』の艦長をしておる織田 青磁朗（オダ セイジロウ）という。」

「お、おう...伊達蒼馬」

なぜか伊達は反射的に頭を軽く下げた。これが艦長の貫録というやつだろうか？それとも長年の習性だろうか？

「で、艦長。コイツの処分はどうすんですかっ？」

「はっ！？処分されるの俺！？」

「当たり前だろ阿呆」

「残念だとは思いますが、我々にも決まりというものがあまして...」

「冗談じゃねえぞ！！事故だっつってんのが聞こえねえのか糞共があ！！」

「フ〜〜〜ム・・・」

艦長はじっくりと唸りながら考え込んだ。

一体これから、伊達はどのような処分を受けてしまうのだろうか？全員の緊張がピークに達した

ころ、艦長の口がようやく開き、驚きの結果を下した。

「よかったら君、我々と共に正式にミカエルの専属パイロットになる気はないかね？」

「・・・・・・・・・・は？」

髭だらけの口から出てきたのは、処分どころか勧誘のお誘いだった。あまりに突如な発言に伊達は呆け、真田と武田は絶叫し、上杉は低リアクションで驚き、森はコンソールを叩いてもう登録の準備を整えている。

「何考えてんすか旦那！！こいつは勝手にこのケルベロスに潜り込んで、ミカエルを持ち出した犯罪人なんすよ！？」

「俺も反対だぞっと。」

「それに関しては不可抗力だっつってんだろ！！」

「あらあらあら・・・・・・・・」

艦長の突然の提案にブリッチ全体が困惑した。突然どこの馬の骨とも解らないどこぞの民間人を正式なパイロットとして招き入れようと言うのだ、問題無い。

キョトンと振る伊達を半分無視し、織田艦長は話を続けた。

「落ち着いて考えてみたまえ諸君。手元の資料を確認してみると戦闘時間はおよそ20分弱、そんな短時間に個人で撃墜した数は48機。何の装備も所持してもしないのに、戦闘の素人にしては出来過ぎた数字とは思わないかね？」

艦長は空中に先刻の戦闘におけるデータを表示しながら話した。そのデータによるとミカエルの撃墜数は48機、ガブリエルの撃墜数は29機、ウリエルの撃墜数は45機、ラファエルの撃墜数は32機。戦闘時間が一番長かったとはいえ、戦闘素人の伊達が撃墜した数が断トツであったのは明白だ。

その数を目の当たりにした二人は「確かに・・・」と不満そうに言いた気は表情で発言が止まった。

「彼の言う事が本当だとしたら、実践訓練も積んでいない彼の活躍は偉大なものだと思うのだよ。実際、彼の活躍によって民間人への被害も最小まで抑えられているのもまた事実。」

確かにそれも言うとおりで。あの時ミカエルが即時発進していなかったら、クラゲやクモの侵攻は進んで一般民間人に多大な被害が出ていたことだったろう。例えその発進が事故だったとしてもだが。

「例え素人で非戦闘要員だったとしても、その実力は目の当たりにすれば誰だってわしはスカウトする。どんな人間でも何か輝くものがあればそれでいいではないか。」

艦長はそう言い終えると、伊達にニコリと徳のある笑顔を向け、さらに一言。

「君の様な人材が必要だ。是非、我々と共に歩む気は無いかね？」

「・・・それって就職ってことっすか？」

「就職・・・？う～む、似たようなものかの。」

「これからここがオレの職場？」

「そんな堅苦しく言う必要は無いがな。一応その通りじゃ。」

数点の確認を取り終えると、伊達は数秒間目を点にして棒立ちしたかと思うと、今度は急に床に膝をつくように崩れ落ち、量の拳を振りかざしてガッツポーズを決めた。オマケに涙まで流している。

「いよっしゃあああああああああああ！！！！再就職万歳iiiiiiiiiiii！！！！」

ブリッチ中に伊達の感動の雄叫びが轟き、全員一瞬だけビックリして耳を塞いでしまった。

しかしその直後、

「納得いかああああああああああん！！！！！！」

入口から突如、これまた伊達の雄叫びに引けを取らない大声が響き、全員の注目を一か所へ集中させた。

艦長も森も、パイロット陣も声の主に視線を向けると、そこには息を荒ら出た一人の青年が立っていた。精悍で全体的に整った顔立ちに若干大きな目、白シャツフード付きジャケットにジーパンの簡素なファッション。彼は今まで全力で走ってここまで来たのか、やたらとゼーゼー吐息を乱したまま、座り込んでいる伊達を睨みつけている。

伊達はこの男が一体誰なのか知らないが、他のメンツ、ととりわけ反応が大きかったパイロットチームは、目を向いて口をポカンと開けっ広げて啞然とした様子だった。

「やっべえ……。」

「真剣に忘れてたぞっと……。」

「ああああああ……。」

「誰？」

「随分と遅かったですね、黄成さん」

「おお、やっと来たのかね？」

「やっと来たのかのかねじゃないですよ！忘れてたぞじゃないですよ！！どう事ですか艦長！？」

男は競歩で艦長の下まで近づくと、いきなり襟を両手で掴んで揺さぶりだした。

「僕が乗る予定だったはずのミカエルを、どうしてこんな悪人面した奴に差し出さなきゃいかなのですか、納得できません！！」

突然現れたかと思えばいきなり艦長を前後に揺さぶりだしたと思ったら、今度は急に泣き目になりだした。とりあえずこのまま艦長が揺さぶられ過ぎると健康に何か害が伴うので武田が後ろから男と羽交い絞めにして拘束した。それでも男は武田の腕の中で暴れるのをやめようとしな

「おい落ちつけ落ち着け。ハイ、どおどおどお...」

「落ち着いてなんかいられるかあ！！放せこの低血圧！！」

一体こいつが誰なのか、そして急に何が起こったのか良く理解できないままだと呆然とその様子を眺めていると、艦長乱れた襟を直しながら解説してくれた。

「彼の名は前田 黄成（マエダ キナシ）。元エンゼル1番機ミカエルのパイロット候補だったものだよ、蒼馬君。」

艦長がそう話し終えるのと同時に、前田と紹介された男は武田の拘束を自力で解き、ずかずかと伊達の元へ歩み寄ってきた。その瞳には、言い寄れぬ怒りの感情が激しく燃え盛っているのが良く分かる。

「大体こんな訓練も受けていない民間人に、なぜミカエルを任せるのか理由が解りません！！ボクは、この日のために一体どれだけの訓練を積み重ねてきたか・・・」

「黄成君、エンゼルの操縦に最も必要なのはパイロットのイメージ力、強い想像力が物を言うのは知っているだろう？残念だが彼はの措置からにたけている、天然の右脳は無人間なのだ。君の様に理屈で動くような男とは違う。」

艦長は言葉の中に付け込む隙も与えてくれぬように、あえてズッパリとハッキリと言い放った。話の流れは良く解らないが、要するにこの男より伊達の方がパイロットとして適任であったのだということだけはわかった。

「ぐう・・・しかし艦長、この男は民間人なのではないでしょうか？そんな戦いと関係ない人間をつてこむなんてそんな...」

「人間生まれてすぐは戦いとは関係ない。戦いに巻き込まれる流れは、人それぞれ違うのだよ。悪いがもう決定済みなんじゃ。桔梗君、ミカエルのパイロットデータを蒼馬君に更新してくれた

まえ。」

「艦長、もう終わってます。」

「さすがに仕事が早いね、キミは。」

艦長は全ての話をし終わると、そのまま杖をつきながら自動ドアの向こうへ消えてしまった。
取り残されたメンバーは、悔しそうに俯いている前田に、声をかけ始めた。

「まあ仕方ないことだと思うぜ？艦長命令は絶対なんだしょ？」

「あなたはこれからもっと自分の個性を出せる仕事をすればいいじゃないですか。」

「なんだったらエンゼルの整備班にでも回してもらえるように口きいてやろうか？」

前田は俯いたまま周囲からの生温かい言葉を全身に浴び続けた。そんなあまりにも情けなすぎる光景ぞしばらくぼーっと外側で眺めていると、突然前田がキッと伊達を睨んできた。その視線からは、昔から馴染みのある危ない感情が伝わってきている。

「・・・認める気は無いぞ、ミカエルの正式パイロットはこのボクなんだ。」

ツカツカと伊達の前まで迫るように近づいてくると、前田はビシッ！と伊達の鼻っ柱めがけて指を刺した。

「こうなったらボクと勝負しろ！！ミカエルのパイロットの資格を賭けて、このボクと勝負だ！！」

「勝負ねえ・・・」

自分より低い身長の人に睨まれてもちっとも怖くは無かった。しかしここでこの勝負を引くわけにはいかなかった。前田にはパイロットとしての威信がかかっており、伊達にとってはこれからの自分の生活が深く関わっているのだから。昔っからこの手の勝負事（主に金銭絡みが多かった）が大好きだった伊達は、即首を縦に振って勝負に応じた。

「へへ、受けてやろうじゃねえかい。何で決着つけるんだ？喧嘩なら負けねえぞ？」

「フッフ、パイロットとしての資質を見極める勝負だ。民間人と訓練された兵士の実力の差を見せてくれる！！」

前田と伊達は両の瞳に炎を燃やし、（今となっては何十年前の表現だったの）決闘の火蓋が切って落とされた。すでに蚊帳の外へと追い出される羽目になった3人を完全に忘れ去って。

赤いエンゼルが、大きな岩の上に乗ってひたすらにライフルを乱射させていた。その弾丸をギリギリの所で、青いエンゼルが回避しながらキャタピラ高速移動で逃げ回っている。

時折青いエンゼルは確認する様にチラチラと赤いエンゼルを見たかと思えば、突然跳躍して赤いエンゼルの足場よりの高い位置からライフルを数発発砲した。

しかし赤い方はこれを後方へ飛んで回避すると、今度はライフルを持つのは反対の手の手首から別の武器を取り出した。手首の装甲が蓋の様に開いて飛び出してきたのは近接戦闘用電熱刀「コダチナイフ」である。これを手にするや、いきなり大きく振りかぶってコダチナイフを思いっきり青い奴へめがけて投げつけた。

想定外の使用方法に驚かされたが、青い方はこれを一瞬バーニアを吹かしながら身をよじることで回避できた。しかしもう一度振り向いた途端、メインカメラいっばいに迫りくるもう一本のコダチナイフが映し出されたかと思った瞬間、ナイフがカメラに突き刺さり目の前がブラックアウトしてしまった。

この瞬間を見逃すことは無く、赤いほうがライフルを捨てて一気にバーニアを吹かして急接近すると、近距離から両手を組み、ハンマーを振り下ろすのと同じ要領で拳を思いっきり青い奴の頭に叩き込んだ。

青いエンゼルは空中で2〜3回転しながら高速度で落下し、うつ伏せになる形で地面にたたき落とされてしまった。

赤いエンゼルは、自分の勝利をアピールする様にVサインをした。

伊達の観ている画面いっばいに「YOU WIN」の文字が表示されると、シートベルトを外してポッドの蓋を開き、外へ頭を出した。

直後、

「反則だろ今のは！！ナイフはあくまで切り裂くための武器であり、飛び道具では無い！！」

伊達よりも先にポッドから出てきていた前田が、いきなり今の対戦に対していちゃもんをつけてきた。

今伊達と前田、そして証人となるためについてきたパイロット三人はここ、ケルベロス艦内にあるシュミレーションルームに来ていた。ここで二人が乗っていたのは、実戦訓練用に開発された「疑似エンゼルコクピット」と言うゲーム機の様なものだ。キューブ型のポッドの中は実際のエンゼルのコクピットと同じ造りになっており、実際にエンゼルを動かしているのと同じ感覚でテスト戦闘を行える優れものなのだ。二人は今これに乗ってゲーム対戦をするように勝負していたのである。勝負の内容はこの疑似エンゼルで対戦し、先に5勝した方が正式にミカエルのパイロットになれると言うルールだ。

しかし、実はこのゲームはすでに24回も続けられており、その全てが伊達の勝利に終わっている。

ではなぜこんなにまで勝負が続いているのかと言うと、対戦が終わるたびに前田があれがズルイだのこれが卑怯だの文句ばかり付けてやり直し試合を繰り返しているせいなのだ。

「なんでもっと正々堂々と戦おうという気持ちになれないんだお前は！？」

「知ったこっちゃねえってんだよこのスカポンタン！！これ以上いちゃもんつけたかったらなあ、俺のHP半分まで減らしてみせろっての！！」

これまでの二人の対戦成績を言うと、すべて伊達の超楽々即効勝利。ダメージをほとんど受けることなく終わっている。対して前田は型にはまった軍人戦闘に対して伊達の問答無用の喧嘩殺法にボコボコにされていた。

「今度は武器を正しく使ってもう一度勝負しろ！！」

「いい加減にしろよっと、前田ぁ。」

ギャーギャーと喚き散らす前田に、ようやく仲裁の声がかかった。武田がボリボリト頭をかきながら二人の間に割って入ってきた。

「なんだよ、決着はまだ...」

「とっくについてんだろ？いい加減に負けを認めろよっと・・・」

言葉の最後にあくびを交えながら、武田が二人の勝負に終止符を打とうとしている。その声に乗かるように、後ろの二人もツカツカと歩いてきながら話した。

「いくら訓練された奴とされてない奴と言ってもよう、この差は無いよなぁ？24敗0勝だぜ？」

「残念かもしれませんが、これは努力の差と言うより、適正・・・いえ、才能の差なんですよきと。」

「お前はパイロットになれる。けどこいつはもっと優秀なパイロットになれる・・・。艦長の目に狂いは無かったという訳だなと・・・。」

前田にとっては、その言葉一つ一つが屈辱だった。プロジェクトセラフィム発動の時から自分はエンゼルのパイロットとしての自覚を持ってシュミレーション訓練を数年間続けてきたのだ。それを、こんなどこの馬の骨とも知らない悪人面したヤンキー野郎に横からかすめ取られてしまっは、今までの努力が水の泡ではないか。

そう言う訳にはいかない。絶対に、絶対に・・・

「納得なんかしてたまるかあああああ！！！！」

とうとう耐え切れなくなった思いが体内で爆発した。目の前の三人を払いのけると、伊達へ向かって拳を振りかざした。

こうなってしまったら後はもうやけくそだ。何が何でもミカエルのパイロットのシートを渡したくないとみえた。

職業軍人として力には自信があった。

なんだけど・・・

ボギャスッ！！

前田の腕よりも若干長い腕を持っていた伊達のカウンターストレートが、前田の顔面に正面衝突した。伊達は地下格闘技場で過去5年間、金を稼ぐために数百人の屈強な男達を病院に送った男であることに気づかなかつたのが勝負の敗因だ。

さらに当時の感覚が蘇り、トドメと言わんばかりに前田の腹部に強烈な左フックと腹下し蹴りが炸裂した。言うておくがこれは全て無意識で行われた攻撃なのさ。

「げふお・・・うぐう・・・痛い」

「・・・あ、悪い、やりすぎた」

「エンゼルの戦闘でも負け、素手の喧嘩でも負け・・・」

「こいつはもう・・・」

「決定ですね？とりあえず医務室に行きましょう」

この後負傷した前田は医務室に運ばれ、二人の勝負の結果は上杉が艦長に報告した。

数時間後、その結果を元に前田と伊達に正式な事例が下された。伊達相馬を、先行部隊「アークエンジェルス」1番機ミカエルの正式パイロットとして起用。さらにパイロット軍人として「中尉」の階級が渡された。

ならびに、前田黄成中尉は今後副司令官として織田艦長の補佐を担当すると同時に、非常事態勤務パイロットとしてアークエンジェルス5番機「メタトロン」を譲渡された。

ちなみにこのメタトロンは非常用の予備機として搭載されたエンゼルであり、基本スペックはミカエルよりだいぶ劣っている。これを受けた前田は自身で「三日は涙が止まらないかも」と述べた。

なにはともあれ、こうして最新地球防衛軍、「アークエンジェルス」は、今ここに誕生したのであった。

これから先、一体どんな戦いが待っているのか、それはだれにもわからない。

ただ全員自分を含め、人間が死なないことのみを考えて戦うだけなのだろう。

続（ひよっとしたらね）